

大地の入り口からの道が、田んぼ状態のようにドロドロになっています。これは、雪解けの始まりであり、春の知らせでもあります。個人的には、外出するときには、車まで長靴、ここで持参した靴を履くという手間が必要であり、我が家の子どもたちにとっては、小さい時はかなりきつかったでしょう。(白い靴は履けないし、新品の靴もすぐにドロドロになる)。さらに今年は、元旦の火災の片づけで、かなり重機で周囲をこねまわしているの、さらにドロドロ。20年前の大地建設時と全く同じ状態のぬかるみです。大地の子どもたちにとっては、慣れっことですが、時々訪れる、取引先の会社関係で、スーツに革靴の方は気の毒ですが、奇妙に、その靴が汚れていないのが不思議です。

こんな春近しの中、卒業文集、卒業証書作りなどが行われ、いよいよ、この季節がやってきたという感じです。今年は、雪が多いおかげで、たっぷり雪遊びを楽しめ、まだまだ雪の世界がたっぷりです。今年は、大地の新しい雪遊び場所を発見して、ほとんどその場所で楽しんでいます。こんな近くに、こんな素敵な場所があるとは、初めての発見でした。そり、雪遊び、かまくら、ここはなんでもできる楽しめる場所です。残りわずか、まだまだここで楽しみます。



## 【子育ての指針】

青山家の4人の子ども達。帰国した長男は、2年後に単独無酸素エベレスト登頂をめざし、再びトレーニングに国内外に出かけるらしい。長女は、京都へ料理の修行にいくらしい。次男は確実に大学進学する。(これは1番確実)。3男は、野球への姿勢は全く変わらず、今年は高校受験の年だが、新聞配りは最後までやるらしい。

皆、思い通り、1番の大切な世界を確実に持ちつつ、面白い魅力的(親にとって)な人間に育ってくれた。これは、親の理想に描いた成長だと思っている。最近、よくどうしたら、そんな子どもに育つのでしょうかという質問を受ける。多少、自信を持って言わせてもらえば、ある程度、育て方の道筋は自分の学び通りだった。法則といおうか指針があった。現在、ベストセラー作家で大地OBの本田健さんが、世界の成功者を、世界中を訪ねて回り、なぜ、成功したのかということ聞きまくって、その法則・パターン・姿勢を学び、自分もそうしたと、当時語っていたが。

私達も、30歳から子育てを開始したが、その関係の本や子育てセミナーなどで学んだことは何もない。もちろん、保育士であったが、保育士専門学校で学んだ知識は全く参考にもならなかった。子育ては、本やマニュアルから学ぶのではなく「何よりも、たくさん子どもを育てた近所の先輩母ちゃんに聞け」という誰からのアドバイスをもとに、魅力的な人生を歩んでいる子どもの親の姿勢を、しっかりと研究させてもらった。さらに、26歳で保育園に勤務したが、そこで出会った面白い子どもや気合いの入った子どもたちの親の育て方を学び、30歳で野外教室を始めた時、何の施設もない適当な大地へ送り込んだ、首都圏からやってくる小中学生(この子たちがまた魅力的であり、現在も素敵な大人になっている)の親たちの育て方をじっくり学んだ。野外教室の能登半島キャンプで、小6同士、けんかして、鎖骨の骨を折った。京都の親へ電話して、誤った。電話口で、その親は、「先生、男の子3人もいて、毎日無事帰ってくるだけで幸運感謝の毎日です。キャンプに行って、骨の1,2本折ってくるのは覚悟して出しています。本人が、どうせ悪いのだから、ほっておいてください」と言われた。これは、気合いの入っている母親であり、その当時、ここまで信じてくれる人に感謝し、涙が出た。と同時に、こんな親になりたいと思った。その子は、高校卒業まで、大地へ来ていたがいつも「うちのおかんは気合いが入っている」「高校のとき、駅の階段で転び、救急車で運ばれているときも、あんたが悪い、命が大丈夫だったら、問題なし」と言って、そのままほっておかれた」などいつもそのエピソードを語ってくれた。

本田健が成功者を調査参考にしてきた同様、私も、子どもたちを通じて、親の生き方、育て方、夫婦のあり方を研究し、学び、それらを参考に育児をおこなってきたと思う。30歳前後では、ちょうど私達夫婦より先輩の方々との出会いも多く、とても参考になり学びの場がとても多かった。その中で、このように夫婦関係を保てばよいとか、このように見守ればよいとかいう、法則やルールが自分たちの中で、確立してきて、それを信じ、それに乗っ取って子どもたちを育ててきた。

特に、山などで出会った家族がとても印象的であった。先頭を歩く父親は、どでかいリュックを背負い黙々と歩き、その後から子どもたちが荷物を背負い、父親の背を見ながらついていく。最後に母親が、微笑みながらも、気合いの入った顔で、見守りながらついてく。家族全員のテントなどの荷物を背負いこみ、一步一步歩く姿を、後ろから見てついていく子どもたちは、弱音を吐くことはできないだろう。でも、後ろでは、母親が見守ってくれている。今でも、山でこんな家族で出会うと、声をかけて嬉しくなってしまう。私は、これが自分の子育ての原点であるような気がする。

様々な出会いや子どもたち・夫婦の子育ての研究や学びのお蔭で、ある種の法則と言おうかパターンというものは、私なりに体得し、こうすればこんな子に育つだろう、逆に、そのパターンでちょっとまずいかもかもしれないというものは、ある程度の高確率で見ることができると自負しているが、人間の子育ては、お金や会社とは違い、取り返しがつかないリスクがあるので、こちらから勝手にアドバイスすることは最近では避けることにしている。自分の家族だけだったら、自分で落とし前がつけられるからいいかもしれない。

でも、たった一つ、真剣に参考にした本がある。それは、ドイツ人が書いた「日本の父へ」というもの。偶然、どこかの青年の家(宿泊施設)で見つけた本だが、その中に「遠くても歩かせよ。雨が降っても迎えにいくな。高い山に登らせよ。朝、子どもを起こしてやるな。遠慮なく使いに出せ。子どもの部屋の整理を手伝うな。仕事をやらせよ。仕事がないと捜させよ」という文章は一生忘れない。この本は、以後私のバイブルとなり、今でも我が家に伝えていかねばならないと思っている。この文章に出会い、この子育ては参考にさせてもらった。偶然にも、この本が、出会うべきしてその後にも、いろいろな人達からも紹介され、現在、ののほな文庫にも、続編もあわせて2冊あるから不思議である。

今の時代では、いろいろな子育て教本やマニュアル本、セミナーなどが大盛況で、目白押しである。それらは、わかりやすく、実践的であり、すぐに使えるものばかりであり、素晴らしい情報が満載されており、適格かつ間違いのないものだと、私も思っている。

ただ、電化製品や自動車の取扱説明書やサービスマニュアルと同じ位置で、子育て取扱説明書・サービスマニュアルを手にいれる気持ちで、求めるのは危険性があると思う。

私達の、子育ての法則・指針は、望まれればお話ししてお伝えするが、とても保守的であり、かつ、この時代では、鬼のような気持ちなくしては実践できないかもしれない。我が家の子ども達と共にいずれお伝えしたい。

先日の新聞記事をコピーします。柔らかい記事ですが、ちょっと「日本の父へ」に似ています。

